

子育て
イエローカード



心の教育

子どもたちの変化を直接感じている学校では、さまざまな教育の改革が始まっています。連載の締めくくりに、その一つの試みを紹介します。

文／中島さなえ イラスト／綾幸子

紹介するのは、文部省が提唱する「心の教育」の具体案の一つ、

「ピア・サポート・プログラム」

です。このプログラムが今後、すべての学校でいっせいに進むとは限りませんが、すでに試験的に実施しているところもあり、いじめなどの起きにくい学校づくりの試みとして、注目を浴びています。このプログラムの考案者であり、普及に力を注いでいる滝元さんにお話をうかがいました。

社会性の「基礎」を補うのが目的

「ピア・サポートは、もともとはカナダなどで、年長の子どもたちに年少の子どもたちの世話をさせ

ると、年長の子どもの人格形成や発達に役だつことに注目して始まった教育活動です。最初は年長者

が年少者の相談相手になるカウン

セリングが中心だったため、ピア

・カウンセリングとも呼ばれてい

ました。一方で、カウンセリング

にこだわらずに、集団の遊びや活

動を通じて、年長者が年少者の世

話をすることで、友だちづくりや

いじめ防止など、広い意味の教育

に役だてようという動きが出てき

て、ピア・サポートという名称に

変わってきたのです」

ピアとは「仲間」のこと、つま

りピア・サポートとは、仲間同士の

支え合いを意味します。こうし

た海外での取り組みを研究した滝

さんは、子ども同士のカウンセリングは、小学生には無理であり、3年制の日本の中・高校生では年齢差が小さすぎて難しく、しかもこの年齢層の子どもにカウンセリングを教えるのはかえって危険だと判断しました。

そこで、「ピア・サポート」なら日本の学校に適していると考え、日本独自のピア・サポートの開発に着手したのです。なぜなら、年少者の世話を通じて子どもを育てようという方法は、日本では伝統的にやってきたことだからです。

「たとえば小学校で、上級生が下級生の世話をする縦割り活動、児童会や生徒会、部活動などは、まさにピア・サポートなんです。ところが、ここ4、5年、そうした活動が低調になり、むしろマイナスマンばかりがめだつてきました」

その背景にあるのは、子どもたちの社会性の未熟さです。

「たとえば、協力しなさいと言っても、今の子どもはどうしたらいいのかわからない。人と協力するより、一人で好きにやりたい、とそっぽを向く子もいる。学校教育で社会性を育成しようにも、それを受け入れる素地である「社会性の基礎」が育っていないんです」「社会性の基礎」は本来、地域社会のなかで、大人や年齢の違う子

どもたちと交わりながら、さまざまな体験を通じて培われるもの。もともと学校は、子どもたちが、そうした基礎をすでに身につけていることを前提として教育してきたのです。

ところが今は、核家族化、少子化、そして地域社会の弱体化によって、子どもたちを囲む人間関係が狭くなり、昔に比べて社会体験が大きく不足しています。そのため、「社会性の基礎」が育っていないまま入学してくる子が多く、従来の学校教育の手法が通用しなくなっていました。学級崩壊やいじめ、不登校なども、そうした状況が背景になっている、と滝さんは指摘します。

そこでまず、「社会性の基礎」を築くところから始めようというのが、ピア・サポートの「領域」に位置づけられるトレーニングです。

「トレーニングは、どう協力すればいいかというスキル（技能）の学習ではありません。協力するって楽しい、一人でやるよりいいところがあるんだ、という気持ちを、子どもに体験させることが目的です。こうした相手と気持ちを通じたという単純な喜びを感じる体験、それが「社会性の基礎」になるんです」

《ふりかえり》「ふりかえり用紙」に記入する。



「ピア・サポート・プログラム」の実際

「領域1」の「ウォーミング・アップ」は、体や心の準備体操に当たり、参加者全員でできるゲームなどを行う。「主活動」もゲームなどの体験できる活動を主とし、関係づくり、話の聞き方、伝え方など、対人関係のスキルに「気づかせる」。毎回最後に「ふりかえり」をし、気づいたことをそれぞれが確認し、スキルとして定着させる。「領域2」も同じ流れで行い、「ウォーミング・アップ」で始めることもある。

《主活動》



「聞き方・伝え方」
育中合わせと向かい合わせの伝達

《ウォーミング・アップ》



例：フルーツバスケット

領域・1
「トレーニング」

領域・2
「活動」

《計画》



6年生



《実施》

6年生と1年生が
いっしょに遊ぶ活動

《ふりかえり》

6年生

仲間づくりの輪を

「学校」から「地域」へ

トレーニングによって「社会性の基礎」ができたなら、次は「領域2」の、社会性を育成する活動です。これは、前述したように、日本の学校ではお手のもの。ただし、ピア・サポートでは、教師主導ではなく、教師は子どもの「気づき」を促し、深めるための支援に徹します。自動車免許の教習に例えれば、「領域1」は教習所内のコース上の教習、「領域2」は生徒自身が判断して運転しなければならぬ路上教習といえます。

学級や学年の垣根を取り払い、複数の教師がかかわることも重要なポイントです。

「担任の先生は自分の学級だけでやろうとしがちなんです。それでは、自分の子どもしか目に入らない親と同じこと。子どもに無理強いをしたり、先生の自己満足に終わってしまうこともあります」

親はつい親だけで子どもを育てられると思いがちですが、それは、思い上がり、だと滝さん。「人間の歴史上、親だけで子どもを育てたことなど、一度もないんです。子育てには第三者の目も手も必要です。担任の先生が自分だけががんばろうというのも、同じ

過ちですね」

「ピア」は、子ども同士に限られません。教師同士、教師と保護者、家庭と地域社会と、子どもを中心にしてピア・サポートの考えが広がっていくのが理想です。

「学校のピア・サポートに保護者が参加することで、学区をベースに新たな地域社会をつくることができます。もちろん、力のある地域ならば、子どもたちをきこで「活動」させればいいわけです」

滝さんが思い描くのは、映画の「寅さん」に象徴される「おたがいさま」の地域社会。「おたがいさま」に支え合いながら、一人一人が自発的に行動できることが、ピア・サポートの最終目的なのです。こうした学校の取り組みを生かすには、保護者が学校や地域の行事に積極的に参加することでしょう。そうして人の輪、つまりはピア・サポートを広げていくことは、子どものみならず、大人にこそ必要なのかもしれません。

●お話をうかがった方

滝 充さん

国立教育研究所
・生徒指導研究室長。宮崎大学
助教授を経て、



1996年から現職。いじめや不登校、暴力行為などの問題に、予防的に取り組む方法の開発にあたった。